

沖

10
2018

平成30年「沖」俳句コンクール発表

俳句雑誌【おき】



群狼

能村 研三

素手で作る俳句

登四郎が吟行で手帳をもたないことは有名な話だが、それに関連して俳人協会で刊行された『俳句を語る』には、北村仁子さんが登四郎にインタビュする形式で、「素手で作る俳句」という文章があったので、一部を紹介したい。

「私のように長く俳句を作っていると、言葉も尽きているし、素材も尽きてしまっています。それでこの頃一番困るのは、地方へ行つて名所旧跡を廻つて、それを見て作るということ、たとえば宮島へ行つて鳥居があるとか、琵琶湖へ行つて浮御堂があるとか、それにひきずられて作るのがだんだんいやになりましたね。家において何もないところから作る方が出来ませんね。踊りなんかでもそうでしょうが、扇とか手拭とか、傘とかを持つて踊るよりも、素手で踊つた方がむしろかくしく、上手に踊れば、おもしろいところでしょう。(中略) 何もないということが自由に発想を広げることができるんですね。」

踏み見るものに水草紅葉かな
夜露降る不意に老舗の店じまひ

私たちの句作りにも大いに参考になる言葉だと思う。素材主義に陥つたり一つの言葉に凭れかかったりすると、純粹な発想を邪魔してしまう恐れもある。

弾力にゆだねて括る走り萩

抑揚のある音読や秋寂びて

橋詰の秋明菊の濡れてをり

流山二句

群狼の離別の地なり萩揺れて

手職名の切絵行灯涼新た

暗算の静思の眼鴨の声

このインタビューは平成元年に行われたものだが、平成七年の沖二十五周年には、先師は新しい沖の目標として「写生新論」を打ち出した。

人事を詠む人が多く、「何がどうしてどうなった」ということをよむ俳句が多くなったので「モノ」を詠め、具象的に詠めということを事あるごとに言った。要するにもものを見つめると実像からもう一つの実像が生まれる。それが写生に徹する面白さである。『写生新論』

先師の俳句姿勢は、目の前で見たものをすぐに句にするのではなく、心の中に一度沈潜させてから濾過されるのを待つて作ろうとしたのである。

安易に道具を用いることなく、素手だけで作る俳句だからこそ、芸術性も生まれるのであろう。

能村 研三

昼のちちろ

森岡 正作

炎帝の目玉を見たる立ち眩み
五尺八寸二つ折りして三尺寝
居丈高なる甚平の食細し
築張りてすぐの一尾を愛しめり
迎へにも送りにも来て鬼やんま
家郷出づ昼のちちろに急かされて
ともかくも働きに出る残暑かな

今年の暑さは特別と言われているが、私は暑さにからきし弱い。汗が噴き出すと、家ではすぐ上半身裸になり、すこし解放された気分になれるのであるが、その分娘らの冷たい視線に耐えねばならない。

登四郎先生に〈発想のひしめく中の裸なり〉という句がある。暑いので裸になって句を作っていると、発想が押し寄せるように湧いてきたというのである。私の裸になる言い訳にしたいが、なかなか生半可な身にはこうはいかない。

しかし、裸になつて気持ちも姿勢も正してみると、不思議なもので、どんと胆が座つたような気になる。失うものはないと、自ら退路を絶つ構えで、ひしめく駄句の中の、きらりとした一句を仕留めたいものである。

能村登四郎の軌跡〔1〕

能村 研三

長靴に腰埋め野分の老教師

『定本咀嚼音』昭24

「良寛忌」の句とは反対に波郷が「野分の中を出勤する老教師の姿を力強い線での確に描き出している」と激賞した句で、言葉をおさえながらも一つの間人画像が描き出されている。「馬酔木」三十周年の特別作品に応募した二十五句の一句で、波郷は「小主観で因果的叙述が多かったが、そのような手法はほとんど払拭されている」と述べている。教師俳句の道が開けて、登四郎はようやく自分の進むべき方向が定まったと確信した。この句は教え子の手によって菅田先生の墓碑として建てら

悴みてあやふみ擁く新珠吾子

『定本咀嚼音』昭24

今瀬剛一著「能村登四郎ノート」には、この年の三月に「奪ひがたきもの」と題する特別作品十句を発表したことが記されている。その中に「悴みてゐてなほ奪ひがたきもの」という句があり、この句に対しては「馬酔木」の先輩同人の百合山羽公、石田波郷、米沢吾亦紅から厳しい指摘があった。登四郎には「悴みて」という措辞がこの時から頭を離れなかつたのかも知れない。私の生まれた十二月十七日は冬にしては少し暖かい日であったそうだ。「あやふみ」は「危踏み」、二人の男の子を亡くした後だけにその成長を心配したようだ。



子にみやげなき秋の夜の肩ぐるま

『定本咀嚼音』昭26

登四郎の句で、この句ほどいろいろな人が鑑賞している句はない。私が生まれた年に登四郎は「馬酔木」同人となり、教職のかたわら水原秋櫻子編の歳時記の編纂や現代俳句協会の幹事等俳人として多忙を極め外出することが多くなった。幼心にも帰りが遅い父親を心配したことが何度もあったことを記憶している。実際には父からの土産や肩車の記憶はないが、いつも慈愛に満ちて育ててくれたことはうれしかった。自註では「こんなごま化し方でもする他はなかった。」と面映ゆく語ったのも登四郎らしい。

ひらく書の第一課さくら濃かりけり

『定本咀嚼音』昭27

登四郎が教鞭をとった市川学園は旧制時代は別として中学、高校の一貫校で六年制であった。登四郎は自分自身の教師生活を述懐して「一番いやなものは卒業期である。生徒を学園から送り出して、また一年に戻ることである。それはちようど渡し守が客を載せて向こう岸に着き、空の舟に棹をさしてまたもとの地点に戻ってくるのに似ていた。」と述べている。しかし眼を輝かせた新入生を迎えインクの匂いのする教科書の一頁目を開くと、教師を何年やっけても緊張して清らかな気持になつたのだろう。

蒼茫集



さるすべり

高橋あさの

晩夏光

宮内とし子

街並にまだ灯の残る涼新た

*ねんごろに咲き休診のさるすべり

扇より先師の句風賜はれり

蜻蛉生る失ひやすきものまとひ

走り根の瘤のいろいろ晩夏光

芋殻火のふいに炎え立つ夕闇かな

すつくと

林昭太郎

雨降り

栗原公子

甕の塩壺の砂糖も梅雨に入る

炎昼をよぎる無音の消防車

*グランドピアノすつくと脚の涼しかり

草に影石ころに影原爆忌

にはたづみ避けてふくらむ踊の輪

まだ海に火照りの残る星祭

*海に向く輸出車の列晩夏光

三伏の値札の上に貼る値札

夕涼し花街といふ裏通り

鉄風鈴八一旧居の軒深し

ペキンダック皮のぱりつと暑氣払

新涼やいるかは空へ二回転

線描のやうな雨降り合歡の花

海紅豆燃ゆ潮風の匂ひくる

*蛍の夜思ひ出つねに食ひちがひ

八月や歌詞忘れたる反戦歌

道ふさぐかに炎帝の仁王立ち

くらげくらげ呑気といふは生き易し

石 鱒

能美昌二郎

* 石鱒の平たくやせて夜の秋
手火花や抱へ込みたる膝頭
半夏生この身の痣は夜疼く
火花果て冷めゆく空に残る月
向日葵や迷路に入口出口あり
夏休み児は虫めがね持ち歩く

鬼 平

千田百里

索麵が真竹の川を小躍りす
暑を掴むどすんと象の扁平足
鬼平が門出る頃か水を打つ
酒房出づ次の夜長の待つてぬし
* 物思ひとは大人のあそび色鳥来
色なき風畳みて樹下の卓布かな

ソーダ水

辻美奈子

ソーダ水一回戦で帰る子に
星涼し火星接近して遠し
* 白玉つくる楽しんで切なうて
薄暑かな亀に甲羅の憂きことも
彦星も来よグラスよく冷えをるぞ
山荘はいまも銀河のなかにあり

火 星

大畑善昭

梅筵火星接近してあたり
どの幹も黒くて暑き日のつづく
蝉が雀に追はれあはやの横つ飛び
振花の振れ具合を愛でてぬし
一雨来て早稲の走り穂こぞりけり
* 蝸は澄みし鋼の音色もつ

潮鳴集



玩具箱

齊藤 實

風鈴の音して風の我がもとに
父の日や似顔絵どこか前衛派
* 色烏やもう使はれぬ玩具箱
味噌蔵の暗さに深く秋夕焼
神木の注連は輪となる盆踊

鉄 橋 諸岡 和子

雲を手で搔き分けてゆく蓴舟
西日たぎらせ踏切の警報音
* 鉄橋の貨車夕焼を真二つ
仁王像の阿の口中や早空
島唄に混じる指笛星月夜

草の絮 平城 静代

ちくちくと胡瓜の刺の憎からず
掃きてより一日始まる百日紅
ラジオからルンバ流るる熱帯夜
母の忌の空をあをと百日紅
* 今更と言はず今から草の絮

空 耳 石川 笙児

登四郎の声は空耳遺句扇
晴れ上がる父の命日ケルン積む
* 大海はこだま帰さず青岬
祖父祖母のお顔は知らず茄子の馬
梅花藻の夢見心地に揺れゐたる

飛鷹選評



能村 研三

紙細工作る鉄の音涼し 西村 渾

紙切り細工は音曲に合わせて様々な形を切り抜く芸であるが、巧みで素早い鉄の使い方が芸の見どころである。縁起物や芝居の一場面など古典的なものから動物や人気アニメのキャラクターまで多岐にわたる。その鉄捌きのよさが見る人たちにも爽涼感を与えてくれた。

反撃へ水飲み干せり雲の峰 村上 葉子

石田波郷に「百日紅ごくごく水を呑むばかり」という句があるが、この句も大胆な動きが面白い。スポーツで、負けこんでいるところを休憩時に水を呑み、反撃に転じたところを順当かもしれないが、何か論争中に、形勢が不利になったところを反撃に転じたのかもしれない。こちらの方が面白い。

面目は要らぬ海月の自由形 下村たつ糸

半透明の傘を広げたり閉じたりして海の中を優雅に浮遊する海月たち、魚は鰭を使って泳ぐのだが、海月は傘の開閉によって小さな渦を発生させて体を動かす。魚から比べれば面目などなくて、正に自分流に自由形で泳いでいるのである。面白いところに目を付けた句である。

海の日の汽笛に応ふ遠汽笛 中西 恒弘

海の日は今では七月の第三月曜日、「海の恩恵に感謝するとともに、海洋日本の繁栄を願う日」とされている。港に停泊中の船が一斉に汽笛を吹鳴する。これに応えて遠くにいる船が汽笛を鳴らした。いかにも海の日らしい広々とした景だ。

噴水のどこから見ても真正面 岡本 秀子

当たり前といえば当たり前だが、広場の中央にある噴水はどこから見ても同じ軌跡を描く。噴水はいろいろな仕掛けがあつて、水が噴き上がる様が花を開くように見えたり、内側の水を包み込むように外側の水が噴き上がったりもする。最近では色とりどりにライトアップされたり、伴奏の音楽によって噴水が舞う姿を楽しむことができる。いずれにせよ、公園のどこにいても皆に公平に見える噴水を、どこから見ても真正面と掴んだのはすばらしい。

水あふるトマトぶつかるとびあふる 稗田 寿明

冷やレトマトであろう。水道の蛇口から勢いよく流れ出る流水でトマトを洗う。この水が山から湧き出る冷たい水ならばもっと美味しいだろう。桶に水を溢れさせ、そこに何個かのトマトを水に浸した。「あふる」のリフレインをうまく効かせ、水の中でぶつかりあう瑞々しいトマトが見える。

佐久間由子

岬 呑 む

岬山の風の色つむすみれ草
犬ふぐり水に光のよみがへる
二た岬霞にかくれ無音界
磯岩のみな仏めく朧の夜
咲き初めて桜に風の生まれをり
切り岸を洗ふしら波桜東風
花冷えや岩に砕ける波の音
御手洗の行きどころなき花筏
仏生会見おろす海の箔のごと
みづみづし燕一閃湾を切る

天心に声のきらめく揚雲雀
牡丹のいまうたかたの白さかな
天つ日をはなさず牡丹風の中
観世音刻める岩に緑さす
観音の息づき青く滴れり
夏潮の青きうねりに風生るる
沖よりの海霧のうす墨岬呑む
神宿る滝ほとばしり一枚岩
群青の沖波ひかり枇杷熟るる
静けさの大きな闇に蛩待つ

沖作品



能村研三選

* 噴水のどこから見ても真正面

お接待の甘き梅干いただきぬ

茄子の馬前脚のやや遊び癖

闇に浮く百葉箱や夜の秋

就活の紺の背広や夏さかん

前のめり同士の間合ひ青蜥蜴

てのひらの汗にはりつく設計図

ウスターソース焦がす鉄板日の盛

身にまとふ雲の切れ端白緋

* 水あふるトマトぶつかるたびあふる

* 紙細工作る鉄の音涼し

蔵店に風の道あり夕端居

大江戸の揚戸造りの店涼し

背を屈め橋潜りゆく舟遊

島唄の流るる渚夏の月

千葉

岡本 秀子

稗田 寿明

西村 渾

* 反撃へ水飲み干せり雲の峰

善人を隠しきれないサングラス

水道全開踊りだしたるプチトマト

潮騒のかすれかすれて明易し

樗咲く村に子どものおなくなる

黙といふ雄弁のあり風死せり

* 面目は要らぬ海月の自由形

花菰を風が梳きゆく遠き恋

福分けのごとく手火花児に渡す

地の息を溜むるほぼづき赤極め

夏つばめ確と気流を掴みけり

* 海の日の汽笛に応ふ遠汽笛

縄文の女神涼しき十頭身

万緑や終着駅の車止め

片陰を食み出し来たる力士かな

市川市

村上 葉子

下村 たつゑ

中西 恒弘